# 皮膚・皮下腫瘍



#### ●プロフィール

- ・発生:全腫瘍に対する皮膚・皮下腫瘍の発生率は、犬では第1位、猫では血液・リンパ系腫瘍に次いで第2 位。
- 発生率の高い腫瘍
  - (犬) 肥満細胞腫、肛門周囲腺腫、脂肪腫、皮脂腺腫、組織球腫、扁平上皮癌、メラニン産生細胞由来 腫瘍、線維肉腫など。
  - (猫) 基底細胞腫瘍、肥満細胞腫、線維肉腫、扁平上皮癌など。
- ・ 良性悪性比率: (犬) 60:40 (猫) 35:65 \*猫では悪性が多い
- ・TNM 分類 (病期の進行度)
  - (T) 原発腫瘍の浸潤性

Tis 浸潤前癌

- TO 腫瘍は認められない
- T1 最大直径が2cm未満、かつ表在性または外方増殖性
- T2 最大直径が2~5cm、または大きさに関係なくほとんど浸潤していない
- T3 最大直径が5cm以上、または大きさに関係なく皮下組織に浸潤
- T4 筋膜面、骨、軟骨などに他の組織に浸潤
- (N) 所属リンパ節転移の有無
  - NO 所属リンパ節に浸潤なし
  - N1 患側リンパ節が可動性 N1a 浸潤なし N1b 浸潤あり
  - N2 対側または両側のリンパ節が可動性 N2a 浸潤なし N2b 浸潤あり
  - N3 固着リンパ節
- (M) 遠隔転移の有無
  - MO 遠隔転移なし
  - M1 遠隔転移あり(領域外リンパ節も含む)
- ・治療法:主に外科手術。十分な外科マージンをとった拡大切除術が最も有効。 外科手術不適応例や外科手術と併用して放射線療法。 リンパ節転移や遠隔転移症例に対しては抗癌剤による補助的化学療法を考慮。

#### \*犬の皮膚組織球腫

・症例:雑種犬、7ヵ月齡、雄。

・主訴:去勢手術を希望して受診。最近になって左口吻部の皮膚の腫瘤に気づいた。

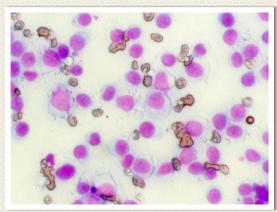
・症状:左口吻部皮膚に孤立性腫瘤、一般状態は良好。

・検査:左口吻部の皮膚腫瘤は直径0.7cm。 腫瘤の細胞診にて組織球系細胞が確認される。 リンパ節転移所見・遠隔転移所見は見られなかった。

· 臨床診断:皮膚組織球腫。



左口吻部の腫瘤



腫瘤の細胞診

・治療:去勢手術と同時に腫瘤切除術を実施。

・確定診断:皮膚組織球腫 マージンクリアー。

·経過:根治。

#### \*犬の悪性メラノーマ

・症例:雑種犬、8歳3カ月齢、雌。

・主訴:約1年前に発生した右眼瞼腫瘤が大きくなってきた。

・症状:右下眼瞼の孤立性腫瘤、一般状態は良好。

・検査:右下眼瞼の腫瘤は直径0.8cm、黒色。 腫瘤の細胞診にて黒色顆粒を有する細胞が確認される。 リンパ節転移所見・遠隔転移所見は見られなかった。

・臨床診断:メラニン産生細胞腫瘍。



右下眼瞼の腫瘤

・治療:外科手術による部分的眼瞼切除術。

・確定診断:悪性メラノーマ T1 N0 M0。マージンクリアー 脈管内浸潤なし。

・経過:術後、経過観察のみ。 2015年1月現在、 術後4年7ヵ月経過するが再発・転移なし。

#### \*犬の扁平上皮癌

・症例:ラブラドールレトリバー、12歳齢、雄。

・主訴:2カ月前に右下眼瞼に小豆大の腫瘤を発見、1カ月前から急速拡大傾向を示す。

・症状:右下眼瞼の腫瘤、一般状態は良好。

・検査:右下眼瞼の腫瘤はカリフラワー状。

腫瘤の細胞診にて扁平上皮細胞が確認される。

リンパ節転移所見・遠隔転移所見は見られなかった。

· 臨床診断:扁平上皮癌 T2 N0 M0。



右下眼瞼の腫瘤



眼瞼も含めた拡大切除



術後11カ月

・治療:眼瞼切除も含めた拡大切除術。

·確定診断:扁平上皮癌 T2 N0 M0。

マージンクリアー 脈管内浸潤なし。

・経過:術後、経過観察のみ。

2015年1月現在、 術後3年8ヵ月経過するが再発・転移なし。

#### \*犬の扁平上皮癌

・症例:ポメラニアン、11歳齢、雌。

・経緯:1年4ヵ月前から近医にて左耳の外耳炎治療を行うも改善なく、6カ月前に他院に転院。 他院でも改善なく4カ月前に生検を実施したところ、扁平上皮癌と診断される。 専門的治療を希望し当院へ転院。

・主訴: 左耳介部の潰瘍。

・症状:左耳介部の腫瘤、一般状態は良好。

・検査:左耳介部の腫瘤は表面が潰瘍化。 腫瘤の細胞診にて扁平上皮細胞が確認される。 リンパ節転移所見・遠隔転移所見は見られなかった。

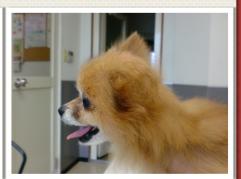
·臨床診断:扁平上皮癌 TX NO MO。



左耳介の腫瘤



耳介も含めた拡大切除



術後5カ月

・治療:耳介切除も含めた拡大切除術。

・確定診断: 扁平上皮癌 T4 N0 M0。 軟骨浸潤あり、マージンクリアー 脈管内浸潤なし。

・経過:術後、経過観察のみ。 術後4年3ヵ月に腎不全で死亡、最後まで再発・転移は見られなかった。

#### \*犬の肛門嚢アポクリン腺癌

・症例:雑種小型犬、13歳齢、雌。

・主訴:1ヵ月前からの軟便と昨日からの食欲不振。

・検査: 肛門6~10時方向に硬固な腫瘤。

腫瘤は2.1×1.3×1.5cm、直腸に固着している。 細胞診にて核異型を伴う上皮系細胞集団を確認。

肝臓および脾臓に腫瘤病変を多数確認。

・臨床診断: 肛門嚢アポクリン腺癌 T4 NX M1。



肛門6~10時方向に腫瘤



腫瘤は直腸に固着



直腸の一部を含めた拡大切除



術後



脾臓摘出



結腸リンパ節

・治療:外科手術による拡大切除術および脾臓摘出、結腸リンパ節切除。

・確定診断: 肛門嚢アポクリン腺癌 T4 N1b M1。 マージンクリアー 脈管内浸潤なし。

・経過:術後、カルボプラチンによる補助的化学療法実施。 術後2ヵ月に転移性肝癌による肝不全のため死亡、最後まで再発は見られなかった。

#### \*猫の基底細胞癌

・症例:日本猫、14歳齢、雄。

・経緯:半年前から右側腰部に皮膚病変を認め、近医にて好酸球性皮膚炎の診断のもとステロイド投与を受け

ていたが改善しない。

専門的な診断および治療を希望し当院へ転院。

・症状:右側腰部皮膚に腫瘤および潰瘍病変、一般状態は良好。

・検査:細胞診にて腫瘍性疾患を疑う。

リンパ節転移所見・遠隔転移所見は見られなかった。



潰瘍部を中心に背側と腹側に腫瘤病変



背側の腫瘤病変



腹側の腫瘤病変

・治療:外科手術による拡大切除術。

·確定診断:基底細胞癌 T3 N0 MO。

マージンクリアー 脈管内浸潤あり。

・経過:術後、補助的化学療法を提示するも希望せず経過観察のみ。

術後2ヵ月に癌性胸膜炎により死亡。

### \*猫の基底細胞癌

・症例:日本猫、12歳齢、雄。

・主訴:左側腰部に皮膚腫瘤を認め、最近になって拡大傾向を示す。

・症状:左側腰部に皮膚腫瘤、一般状態は良好。

・検査:細胞診にて腫瘍性疾患を疑う。



左側腰部の皮膚腫瘤

・治療:外科手術による拡大切除術。

·確定診断:基底細胞癌 T3 N0 M0。

マージンクリアー 脈管内浸潤なし。

·経過:根治。